

恋のABCお届けします

目次

恋のABCお届けします

5

もっと！ 恋のABCお届けします

169

恋のABCお届けします

1 恋はCから配達される

徒歩十分のスーパーマーケットで買ったのは、特売のトマトと牛切り落とし。誕生日だというのに、このスペシャル感のなさには我ながら呆れてしまう。

まあ、ついでに高級アイスクリームも買ったあたりがスペシャルだということにしておこう。ラムレーズンとチョコレートブラウニーで迷って、結局両方買って来た。バースデースペシャルである。

——本日七月二十一日、私、中城多美子はどうとう三十歳を迎えてしまった。

昨晩はレンタルDVDショップでやたらロマンチックなタイトルの洋画を借りて、お気に入りの日本酒とお手製のつまみで祝杯をあげた。お一人様バースデーカウントダウンパーティーといったところか。

ところがこの洋画が曲者だった。

とんだお色気映画で、中盤以降艶めかしい絡みの連続。

おかげで何やらモンモンとしたやり切れない気持ちになってしまった。エンディング後、私は日本酒を飲みまくり、つまみを作り足し、自宅で一人酔っ払いながら本日の誕生日を迎えたのだった。

女を捨てたまま、栄えある三十代突入である。

(一時四十分……あと二十分)

私は買い物袋を提げながら携帯で時間を確認すると、少し歩みを速めた。

マンションの一階に入っているプール付きのスポーツジムの方を見ないようにして、なぜかいつも開きっぱなしになっているオートロックのエントランスをくぐる。

このマンションに引っ越してきて三年。

子供のいない夫婦やお年寄り夫婦が多く、落ち着いた雰囲気なのは気に入っているが、一階のテナントだけがどうも気に入らない。

スポーツジムでは、室内が見えないよう、大きな窓全体に反射フィルムを貼っている。

このフィルムが私の体を残酷に映し出すのだ。一五八センチ六十四キロのダイナマイトボディを……

買い物袋の食い込んだ腕の肉、服がぱつんぱつんになっている背中、スカートのシルエットを台無しにする大きなお尻。

本人の許可なくこんな無様な姿を反射させるなんて、これは無言の圧力だ。

いや、無言ではない。

ポストに『近所様限定クーポン』を定期的に入れてくるのだから性質が悪い。そんなに私を会わせたいのだろうか。

(人のコンプレックスを商売にするなんて……)

イライラと反射フィルムを睨むと、ダイナマイトな私が睨み返してきた。マンションのエントランスホールを進み、エレベーターに乗ると、汗が噴き出してくる。

私が二時になる前に自宅に戻りたいのは、だいたい毎日この時間帯になると、宅配便が届くからだ。

自宅で仕事をしているせいで、資料や納品物などの発送・受け取りは、宅配業者と直接することが多い。特に今日は仕事関係の荷物が色々と届く予定だった。

不在だと配達員さんに迷惑をかけてしまう……なんていうのは表向きの理由。

実はこのマンション担当の配達員さんが私好みのイケメンで、彼に会えるのを勝手に楽しみにしているから、というのが紛れもない本音だ。

今の私の生活では、外界との接点なんて食品の買い出しくらい。

スーパーにはレジ打ちのおばちゃんか鮮魚売り場のおじさんしかいないから、イケメン配達員に自宅のドアを叩かれるのは、私にとってアイドル握手会並みの重要イベントなのだ。

自宅に入り、冷凍庫にアイスクリームをしまつて、汗ばんだ顔をタオルでガーツと拭く。

二十代前半には一応毎日していた化粧も、いつの間にかやらしなくなった。

自宅で仕事をしていると本当に誰とも会わないから、肌には負担をかけるだけバカバカしい。

一度スツピン生活に慣れてしまえば、化粧は苦痛でしかなかった。

髪を一つに括って、仕事場になっている部屋で作業をしていると、チャイムが鳴る。

二時十分。王子様の到着だ。

私は再び汗の浮かんできた額を擦り、手ぐしで髪を撫でつける。

『イーグル便です。お届けものです』

インターフォンからいつもの柔らかい声がした。優しげなこの声も私のお気に入り。

そしてお行儀の良い彼は、エントランスホールの扉が開きっぱなしになっていると、下のインターフォンからコールしてくる。小さなところで感じられる礼儀正しさも、彼の素敵ポイントだ。

「ご苦勞様です」

インターフォンにそう答えて、私はエレベーターで上がってくる彼を玄関で待ち構える。

コン、コン、コン。

玄関ベルがあるのに、彼はいつもドアを小さくノックする。

一、二、三。

息を殺して三つ数えた私は、お上品な作り笑顔でドアを開けた。

ああ、今日も男前だ。人懐っこい大きな瞳、柔らかそうにはねる髪。

均整の取れた逆三角形の体は、身長百八十センチ近くありそう。

歳は私よりちょっと下だろうな。

今日は暑かったから制服の縞シャツが汗で肌にくっつき、そのシャツを押し上げるように大胸筋が上下しているのが分かる。これは想像していた以上にマッチョかも。

やばい、マジいい男。付き合うなんて恐れ多いけれど、ちょっとだけ……指一本でも触れてみた

い、なんて考えてしまうのは、昨晚見た映画のせいだろうか。

私の頭の中で、あのしつこいほどの男女の絡みがフラッシュバックした。

彼はどんなエッチをするのだろうか……アブない妄想に取りつかれそうになっていると、彼の声
が私を現実に取り戻す。

「ここ、サインお願いします」

「……はい。今日は暑いですね」

「ヤバいっすね」

「あ、アイスクリームあるんで、よかつたらエッチします？」

「……はい。あ、でも配達終わらせないとダメなんで、仕事終わってからまた来ます」

——待て、待て、待てー！！

今私、何て言いました？ エッチとか口走りませんでしたかああ？

私が狼狽^{うろた}えている間に、彼はドアを閉めて出ていってしまふ。

閉まったドアを呆然と見つめながら、私は自分の言葉を頭の中で再生してみた。

——アイスクリームあるんで、よかつたらエッチします？

……言っちゃったよね？ ……やっぱり言っちゃったよね！ 何という逆セクハラ！

ちがぁーう！ 本当は「アイスクリームあるんで、よかつたら一ついります？」って言いたかった
だけなのに。

言い間違えた……昨晚見たお色気映画のフラッシュバックが、私の脳みそをピンク色にシヨート

させたのだ。

自分の情けない言い間違いに、ここ数年感じたことのなかった羞恥^{しゆうち}心が湧き上がってきた。玄関
で一人赤面しながら髪をかきむしってみてももう遅い。

中城多美子三十歳。人生の黒歴史に残る誕生日を本日迎えました。

玄関でしばし放心した後、私は受け取った荷物に視線を落とした。

イケメンが持ってきてくれた荷物は全部で三つ。

一つは仕事関係のもので、出版社の名前が印刷された大型封筒。

もう一つはえっちゃんからだろう。えっちゃんは、中学生の頃から毎年欠かさず誕生日プレゼント
をくれるありがたい大親友だ。

そして最後の一つは、エバーラスティング商会から。内容物の欄には「化粧品」と書かれている。
この荷物を見た私は、思わずハアアア〜と大きなため息を吐き出した。

こんな気分の時にコイツを見たくはなかった。仕事の資料として購入したソレは決して化粧品な
どではない。

私は箱を開け、中身を確認した。

そこに収まっていたのはオーダー通り、大人の玩具^{おもちゃ}。正式名称バイブレーター（性具）。

大人の玩具を通販購入するわ、イケメン配達員をいきなりエッチに誘うわ……これじゃ、まるで
欲求不満をこじらせた三十路^{みそじ}独身女性みたいじゃないか！

まあ、確かに私は欲求不満をこじらせた三十路独身女性かもしれないけれど、エッチに誘ったのは言い間違いだし、大人の玩具は仕事用だし……

「誤解だ〜〜！」

私は一人吼えたと、行き場のない羞恥心に悶えながら再び髪をかきむしった。

◇

『マジ！ 超ウケるんだけどお』

電話の向こうで、ギャハハハと大爆笑された。遠くからはキャハハという可愛い笑い声も聞こえてくる。

えっちゃんに電話して誕生日プレゼントのお礼を言ったついでに、先ほどの逆セクハラも報告したら、予想以上の大爆笑。お笑い芸人なら喜ぶところだけど、ただの三十路女なのでウケても嬉しくないです。

ちなみにギャハハハという下品な笑いはいえっちゃん、可愛い笑いは二歳になるえっちゃんの子、俊平君。

えっちゃんは私と同年ではあるが、早々と結婚して、今や子持ちのママだ。

『それで、エッチするの？』

「え!?!」

『仕事終わったら来るんじゃないの？ そのイケメン配達員』

「来ないでしょ。来たとしてもアイスクリーム狙いだろうし……そもそも、私の言い間違いに気がついてないかも」

『そんなの分からないじゃない。一応シャワー浴びて準備しときなよ！ 私からのプレゼント使ってね』

私は片手に握りしめていたえっちゃんからのプレゼントをもう一度眺める。

スケスケのパンティーとキャミのランジェリーセット。ピンクのシフォン地に黒のレースが小悪魔チックだ。もちろん、サイズはL。

サイズは合うけどデザインは合わないよ。このデカ尻にフリルの付いたTバックなんて着けたら、フリルが泣くわ。

『だー！ チェチエチエチエ、だー！ だー、ママ！』

『俊ちゃん、おやつ欲しがって暴れてるからもう切るね〜。タミの仕事落ち着いたらゆっくり会おうよ。俊、ダメ！ あ〜……じゃあね、面白いことになったら報告してね』

私はこれ以上面白いことにならないようにと祈りながら電話を切った。

えっちゃんのアドバイスを聞き入れたわけじゃないけど、シャワーを浴びておくことにする。自分が放った逆セクハラの衝撃で、嫌な汗をかいていた。

この後、いつも通り仕事場に籠ると、時間を忘れて没頭できた。

時間を忘れるのは良い仕事ができている時だ。ダメな時はしょっちゅうウロウロしながら飲み食いしてしまうのに、今日は気がつけば四時間が経過していた。頭を上げると、レースのカーテン越しに夕焼けが見える。

座りっぱなしだった体を解しつつキッチンに行き、晩ご飯の支度をやる。

一人暮らしを始めたばかりの頃は、コンビ二弁当や出来合いのお惣菜を買うことが多かったけれど、歳を重ねるにつれ料理をする回数が増えた。

誰に食べさせるわけでもなく、ただ自分のためだけに手早く作る。

どんなに適当に作っても、手料理の方が優しい味がするし、お腹に残る。

今日は、酸化する前に使い切りたかった赤ワインでハヤシライスだ。

特売の牛切り落としは、脂身が多めで煮込み料理にはもってこい。特売の超完熟トマトを手でぶちゅちゅっと潰しながら投入する。仕上げに生クリームを入れたいけど、買っていないから牛乳でいちゃ。

煮込む間にキッチンを片付けていると、プーツとインターフォンの音が部屋に響いた。

「まじか……」

一人そう呟いた私は、インターフォンを睨んで固まった。

忘れていたわけじゃない。イケメンは確かに言った。「仕事終わってからまた来ます」って。

「はい」

恐る恐るインターフォンに答える。

『イーグル便です』

「……ご苦労様です」

アイスクリーム食べずに取っておいてよかったー！……って、アイスクリームだよ、目的は……

握りしめていたお玉をシンクに放り投げ、慌ててアイスクリームを取り出し玄関付近でウロウロする。

やがてコン、コン、コンと、いつものようにドアが三回小さくノックされた。

一、二、三。

数えて、私はアイスクリーム片手にドアを開ける。

「こんばんはー」

イーグル便のトレードマークでもある縞模様のシャツを着たイケメン配達員が、いつもの爽やかさで玄関に入ってきた。

昼間見たばかりだというのに、思わず見とれてしまう。柔らかな微笑みに、筋肉質の体。やっぱりいい男だ。

シャツはすつかり乾いているけれど、仄かに漂ってくる汗の匂いは官能的にすら思える。

彼のフェロモンに悩殺されて、思考が止まってしまう。

私の脳は、再びB級映画の一番いやらしいシーンを再生し始めた。

絡み合う男女。私が最後にあんな濃密な時間を過ごしたのは、いつだったろう……

(ダメだ！　こういうハレンチな妄想に取りつかれたから、さつきは失敗しちゃったのに)
妄想を振り払おうと顔を引き締めた私に、彼は言った。

「アイスクリーム、いただきますに来ました」

彼は私の手からアイスクリームを取り上げ、長い睫毛に縁どられた目を細めて微笑む。その煌々しさに目が釘付けになる。

(そうか、やっぱりアイスクリームだよね……)

納得しつつも、眩しい笑顔を前にポーツとしてしまった。うう……そのクソ可愛い微笑みは反則です。

ぼんやりしている私を面白そうに見ながら、彼は言葉が続けた。

「ラムレーズンとチョコレートブラウニー……両方食べちゃっていいんですか？」

「あ、どうぞどうぞ……全部……」

「全部？　本当に？」

彼は悪戯っぽくそう言うと、チョコレートブラウニーのふたを開けて裏をぺろりと舐めた。

そしてスプーンがないことに気がついてキッチンに向かおうとした私に、人さし指を差し出してくる。

彼の節くれた指先にはアイスクリーム。

あなた、それを私にどうしろと……

「はい」

「……」

アイスクリームののった人さし指が、私の唇に触れそうなほどに近づいてくる。私は自分でも信じられない大胆さで彼の指を口に含んでいた。

小さなアイスクリームの塊が口の中で溶ける。

緊張しすぎて味がしない。

だけどそれは媚薬のように私の奥で甘く溶け、固く閉じていたはずの心のネジを外してしまう。

「全部……食べて」

私はそう囁いた。

優しさを湛えた彼の目が鋭くなり、その視線が私の視線と絡み合う。

アイスクリームの魔法で、二人の距離が急速に狭まっていた。

「アイスよりエッチの方がいいな」

彼は私の耳元で小悪魔的に囁いた。

(やっぱりちゃんと聞き取っていたんだ、私の言い間違い)

ぼんやりそう思っていると、彼はさらに言った。

「キスしていい？」

なんと答えればいいのか迷っているうちに、気がついたらキスをされていた。

そよ風のような優しいキス。汗とチョコレートブラウニーのキス。

「もっとキスしたい。全部食べてしまいたい」

彼の吐息に交じる言葉は、熱風のように私を耳から溶かしていく。

彼の唇が私の耳を撫で、首筋を撫で、また唇に戻ってくる。

日焼けした顔とキラキラ輝く瞳が私を捉えて離さない。

「セックスしよ」

「……はい」

もう、どうなってもいいと思った。

こんな普通じゃないと分かっているけど、ここで断ったら、私はきっと女を捨てるどころかおっさんになってしまっただろう。やっぱり、女として求められている時には女でいたい。

彼は私の返事を聞いて、確認するように再びキスをしてきた。

今度は優しく触れるだけのキスじゃない。唇の間から熱い舌を割り込ませ、私の口内を探索する。誘われるがまま、私は彼の舌に自分のそれを絡めた。

熱い彼の舌が私の舌を溶かしていく。

熱い……熱い……

「……大丈夫？」

彼が私の顔を覗き込んでいた。

キスをするのに夢中で、息を上手く吸えていなかった私は、意識を軽く飛ばしていたらしい。恥ずかしい。三十歳にもなってキスで失神しそうになるとは……

「ごめん、焦りすぎた。ゆっくりしよ」

そう言うと、彼は私をひよいと抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこ！ 人生初のお姫様抱っこ!! だけど私、六十四キロのお姫様だから。

「お、重いから！ 私重いから……」

「ん〜……五十キロくらい？ 全然平気。ベッドルーム行こ」

「……リビング入って左」

「オッケー、お邪魔しまーす」

少年のような爽やかさで、彼は大人の欲望を満たすためにベッドルームへ向かう。

私は彼の首にしがみつき、妄想体重五十キロのお姫様になっていた。

宣言通り、彼は私をベッドにゆっくり下ろすと、キラキラとした笑顔で優しいキスをくれた。

そして私のご機嫌を伺うように、あちこちに唇を落とす。

彼は一つに括っていた私の髪を解き、「いい匂い」と言っただけでそこに顔を埋めた。

(えっちゃん、シャワーを勧めてくれてありがとう)

大親友に感謝しつつも、私は彼の指がカットソーの中にちよこちよこ入るたびに身を固くしていた。

こんなイケメンに触られる時が来ると分かっていたら、ここまでおなかの肉、付けなかったのに……

「俺、仕事終わって真っ直ぐ来たから汗臭い。シャワー使わせてもらおっかな」

いかにも渋々といった感じで私から体を離れた彼が、そう言って着ていた服を勢いよく脱いだ。浅黒く日焼けした筋肉質な肉体が現れ、私は思わずため息を漏らす。なんて綺麗に割れた腹筋。こつそり想像していたよりずっとマッチョだ。

「……汗の匂い、嫌いじゃないよ」

そう言って彼を引き留めた。

体を離したくないのもあったけれど、本当に気にならないのだ。

汗の匂いが好きなのではない。けれど、彼の匂いは、彼と密着している証のようで愛おしい。「本当に？　じゃあこのまま続行したいな。今いいところだし」

「……うん……あの……私、洋服着ていい？」

「え？　どういこと？」

「あの、下着脱ぐから、下の方からちゃちゃっとしてもらえれば……」

「……何で？　見られたくない傷でもある？」

「ううん、そんな深刻な理由じゃなくて……食糧危機に備えて蓄えた贅肉が……」

こんな告白するのが恥ずかしくて、思わず目を逸らす。

ククク……と押し殺したような声に顔を上げると、彼が顔を赤くして笑っていた。

「可愛い！　俺、楽しくなってきた」

そう言った彼は、私の服をむしり取っていく。

ギャー！　可愛いって言われて一瞬極楽気分になったのに、ジェットコースターで地獄行き！

夏場の薄着は、一瞬で脱がされる。

カットソーは放り出され、ブラは早業で取り外された。

(ヤバい、ジーパンにがつり腹肉がのつてるのを見られる！)

そう思った私の行動はすばやい。自らジーパンを脱ぎ、色気のないショーツ一丁になった。

「脱ぎたいのか脱ぎたくないのか、どっち？」

顔を覗き込んでくる彼は楽しそうだ。

「もっどっちでも……あ……」

乳房にキスをされて、私は声を失う。

彼の舌がゆつくりと乳房をなぞった。最初はこそばゆかった感覚も、ぐんぐん気持ちよくなっていく。

彼は片方の乳房を舌先で転がしながら、もう片方を指で弄ぶ。

(おっぱいを触られるのってこんなに気持ちいいんだ……ううん、この人が上手なのかも……)

快感がじんわりと全身に広がっていき、急速に体の奥が潤ってくるのを感じた。

「タミコちゃんのおっぱい、ふわふわで超気持ちいい」

「……なんで名前知ってるの？」

「中城多美子。知ってるよ、送り状に書いてある」

「……ああ！……」

不意打ちにショーツの中に手を入れられて、私は思わず腰を引いた。

彼の骨ばった指が下の毛を撫で、ゆつくりと割れ目に入り込む。潤いの中に指先を浸した彼は、滑らせるようにそこを探索した。

私は突然怖くなって反射的に足を固く閉じる。

今にも泣きそうに体を強張らせている私に、彼はキスをしながら話しかけてきた。

「触っていい？ 触らせて。タミコ」

「やだ……その名前嫌いだから……呼ばないで」

「何で？ 良い名前じゃん」

「ああ……ん……何か昔っぽい名前……ああ……ヤダああ」

唇を吸われ、熟れた瞳で見つめられる。

彼は上手に私の性欲をかきたて、羞恥心を消してくれた。

彼の長い指に敏感な部分をかき回されて、私はベッドの上で腰をくねらせる。

指の動きに合わせてくちゅくちゅと淫靡な音が響いた。彼はわざと音を鳴らすように、二本の指を私の中で揺らす。

「すっげ濡れてる。ここもほら……硬くなって……」

「だあ……めえ……あ……ああっ！」

自分でも分かるほど硬く膨れたクリトリスを指先で弾かれた。私は下半身から駆け上がった。快感に、ビクツと体を反らす。

休みなくやってくる甘い刺激にビクビクと体を震わせていると、彼は飢えた雄の目で私の顔を覗

き込んだ。

快楽の秘密を全て知っているかのように、容赦なく指が動かされる。

根元をコリコリと刺激されると、呼吸をしようとしても喘ぎ声になってしまう。そんな自分が恥ずかしくて両手で顔を覆った。

「タミちゃん、ここ好き？ もっと欲しい？」

「ヤ……ああ……タあ……」

「嫌？ でもこんなに吸いついてくる。熱くてぐちよぐちよで……」

「いやあ……」

「タミちゃん、エロくて可愛い……もっと喘いで。もっと声を聞かせて。俺に全部見せて」

私の体は刺激を求めて自然と開いていた。

足を広げ、彼の前に自分のあそこを晒す。

もっと触ってほしい、もっと感じさせてほしい。

彼の指に欲望を掘り起こされ、私は乱れていく。

彼は左手で私の右足を高く持ち上げて、右手でクリトリスと膣の両方をいっぺんに攻めてくる。

粘着質な液体をグチュグチュとかき混ぜる音はどんどん大きくなり、私の喘ぎ声に重なった。大きな快感が何度も体を駆け抜け、私の中で火花のような炎を瞬かせる。

「あ、あ、……タあメえ……くる、くる、イっちゃう……」

「来るの？ 行っちゃうの？ どっち？」

「あ、んあ、イっちゃう、あ、イっちゃう、あ！……」
体の中で快感が共鳴して輝く。

世界が弾ける。
真っ白の空間。

やがてそこに私の鼓動が響き始める。

私……気持ちよすぎて泣いてる。

「タミちゃん」

しばしの間、別世界に飛ばされていた私は彼の声で引き戻される。

涙が滲んだ私の目に飛び込んだのは、彼の大きくなったアレだった。

でかつ！ 私は慌てて目を擦り、涙を拭い去る。

はるか昔、十年ほど前に見たソレとは、サイズがかなり異なる気がする。

比較対象は一本だけなので、どれぐらいが平均なのかは分からないけれど、私はリアルに心配になつてきた。ものすごく久しぶりだからだ。

別の意味で涙目になった私をよそに、彼はどこからか出てきたコンドームを装着して準備完了。

キラキラ度が増した大きな瞳で私に微笑みかける。

「あの……大きくないですか？」

その巨大なものに怯えるあまり、思わず敬語になった。

「タミちゃんのイキ顔がエロくて大きくなっちゃった」

そんなテヘペロみたいな可愛い顔されても、下半身は極悪ですから。

「あの……ゆっくり挿れて……ね……」

「初めて？」

「いや、違うけど……久々だから」

「じゃあ……もうちよつと挿れやすくしよつか」

軽く押されて、私はベッドに倒れる。

彼はまた私の唇を塞ぐと、情熱的なキスをたっぷりくれた。

そして、彼は唇を私の下半身へ真っ直ぐ滑らせ、「開けごま」とばかりに両腿にキスをする。そしてその中心に顔を埋めた。

（ウソ、ウソ、舐められてる！）

あそこを男性に舐められるなんて、生まれて初めてだった。昔付き合っていた唯一の彼氏はそういうことをしない人だったから、この年齢になるまで未体験だったのだ。

なんだか畏れ多くて初めは緊張していたけれど、ぬるりと舐め回された途端、すぐに快感がそれを凌駕していった。

彼はそれを感じ取ったんだろう。ますます舌の動きを速くして私を翻弄していく。

「あひゃ……ああ……あ……あん……」

一度口を開いてしまうと喘ぎ声が止まらない。

ジュルジュル、ペチャペチャ、という唾液と愛液が交じる音は、どこか獸的だ。
気持ちいい、すごく気持ちいい。

彼の舌は柔らかくて、指とは全然違う、体が溶けていきそうな感触。

子宮を締めつけるような波が、体の芯に走り始める。

一度イって敏感になっていた私は、すぐにまたイキそうになる。

だけでももう一步のところで彼が顔を上げた。私を見上げる顔は、苦しそうに上気している。

「……タミちゃん……これ、好き？」

「……大……好き……」

「じゃ……今度また……しよう。今は……挿れさせて……我慢できない」

顔を歪ませながら声を絞り出すようにして言うと、彼は体を起こした。

そしてすばやく太腿の間に腰を収め、私の両足を抱え込む。

私のあそこに彼のモノがぐりぐりと押しつけられるけれど、なかなか入りそうにない。

「挿れるよ」

彼はそう宣言すると、私の両足を持ち上げて自分の肩にかけた。

私の腰が自然と上を向く。そこへ彼のモノがゆつくりと力強く挿しこまれた。

一瞬電撃が走ったけど、全部収まってしまうと、その圧迫感意外にも心地良かった。

彼は気遣うように、私の顔を覗き込みながらじっとしている。

性欲に支配されていても、相手を思いやる余裕を残しているようだ。

「タミちゃんの中……まじ気持ちいい。……ヌルヌルのマシユマロで締めつけられている……みたい」

そう言っただけは、私の様子を窺いながらゆつくりと動き出す。

「ん〜あ……」

もう喘ぎ声が止まらない。過去のセックスでは荒い鼻息しか出なかったのに、今は息を吐こうとすると喘ぎ声になる。

彼のモノが私の奥を擦るたびに、ジーン、ジーンという快感が背筋に走り、体中に広がった。

気持ちよすぎる……もつと突いてほしい。

「もつと……」

「……もつと……欲しい？」

「欲し……い。いっぱい……突いて……」

その途端、彼は肩にかけていた私の足を抱えながら、思いっきり私を引き寄せた。

根元まで深く挿し込まれ、私の子宮口を乱暴にノックする。

「あー！ あやー！」

すごい……すごい存在感。

圧迫されながら体の内側を執拗に擦られ、私は掘り起こされる快感に鳥肌を立てた。

彼は一気に全部捻じ込んで引き抜き、また捻じ込んでくる。

激しく体を揺さぶられながら、私は自分の口を両手で押さえていた。あまりの気持ちよさに、油

断すると悲鳴のような声が出てしまいそうだったから。

彼の動きに合わせて、グチュ、グチュ、グチュ、という愛液のいやらしい音がベッドルームを満たしていく。

「タミちゃん……すごい……たくさん濡れて……ヤバイ」

彼が呻くように低い声でそう言ったのを、私は快樂の嵐の中で聞いていた。

どこかに掴まっていけないと呑み込まれてしまいそうで、私は一生懸命、彼の体に足を巻きつける。

「気持ち……いい……」

ゾクゾクという快感に襲われて、私は泣き声で彼に訴えていた。

もう止めてほしい。これ以上気持ちよくなったらおかしくなりそう。

だけど止めてほしくない……このまま行くところまで行ってしまいたい……

「あああー！」

激しく突かれながら、私はもう我慢ができなくなって高く声をあげる。

「ああ……もう……」

手負いの獣みたいに彼がそう唸ると、大粒の汗がポタポタと私の体に滴り落ちてきた。

彫刻のような彼の体が大きく震えた瞬間、私の中で彼が膨らむ。

ドクン、ドクン、と彼が私の中で脈打つのを感じながら、私は夢中でその体にしがみついていた。



当たり前のように腕枕してくれる彼の名前を、私はまだ知らない。
知りたいけど知りたくない。

名前を知ってしまったら、彼にときめいてしまうのは分かっていた。

私はざわめく気持ちにふたをするように、目を閉じる。

そして汗と体液が混じった官能的な香りの中、ただ漂っていた。

愛し合った後にしか発せられないその匂いは、不快ではない。だけど彼は気になったようだ。

「タミちゃん、俺マジ汗臭いだろ？ シャワー借りていい？」

と言ったかと思うと、「一緒に入る？」と私を誘った。

「いや、いや、私は結構です」

どこぞの遠慮するサラリーマンのように断る私を、彼は面白そうに見る。それから立ち上がると、性欲を解放した後の彼は、イノセントな少年みいだ。

（私をちゃん付けで呼んでるけど、年下なんだろうな）

そう思ってこっそりため息を吐きつつ、私は開けっ放しのベッドルームから見えているバスルームのドアを指さした。

無防備に全裸を晒す彼の後ろ姿を、私は思わず凝視する。すっごくいい。正面もいけど後ろ姿もいい。

広い背中からウエストへと傾斜を描く日焼けした肌。逆三角形の上半身を支えるヒップは筋肉で盛り上がっていて、二つの岩みたい。そして逞しい太腿。

そんな姿をぼんやりと見送ると、バスルームからシャワーの音が聞こえてきた。

自分の部屋に自分以外の人が使うシャワーの音が響くのは、なんだか新鮮で嬉しい。

ベッドの上で体を甘く軋ませながら、私はこの一時間で我が身に起こったことを振り返っていた。——とんでもなくふしだらな行為をしてしまった。

職業はともかく名前も知らない男性を自宅に招き入れ、エッチをしてしまった。

私は天井に向かってため息を吐き出す。だけどそれはため息というより、甘い吐息だった。

ヤっちゃった。後悔すべきなのだろう。だけど、今の私を包むのはトロトロに甘くて温かな充実感だ。

私は起き上がり、さっきまで彼の所有物のように扱われていた自分の裸体を服の中に収めて、ゆつくりとベッドルームを出た。

彼に渡す新しいバスタオルを用意して、キッチンに向かう。

お腹を空かせているかもしれない彼のために、何か食べるものを用意しておこう。



「タミちゃん、一人暮らし？ いいマンションだね」

上半身裸でボクサーパンツだけ身につけたイケメンが、私の作ったハヤシライスを食べている。

シャワーから上がった彼が予想通り「腹減った」と絶叫したので、ちょうど出来上がった夕食を提供したのだ。

ハヤシライスはドリアやオムレツのソースにも使えるので、いつも多めに作る。

今日もたくさん作ったのだけれど、大盛り二杯目に突入している彼の食べっぷりを見ると、余ることなんてなさそうだ。

「自宅で仕事しているから、2LDKじゃないと片付かなくて。いいマンションなんだけど、ファミリー向けだから、一人暮らしだとんだか目立ってる気がする」

「主婦は何でも話題にするしな。仕事って何してんの？」

「……デ、デザイン関係……」

「おおクリエイター系！ 俺そういう方面の才能は全くないから尊敬する」

話しながらも彼はどんどんハヤシライスをお腹に収めていく。私も早食いな方だけど、彼も負けていない。

自分の作った料理をたくさん食べてもらえるのって、こんなに嬉しいことなんだ。

初めて知った幸福感に私は酔い、味もよく分らないまま、自分の分を食べ終わった。「ごちそう様でした!」

と小学生のように元気よく言った彼は、空になった皿をキッチンに運んでいく。

「テーブルの上に置いてね」と声をかけたのだが、キッチンからは水を出す音が聞こえてきた。見に行くと、彼がお皿を洗ってくれている。

自分の家のキッチンで、いい男が食器を洗っているという夢のようなシチュエーションを心に刻みながら、私は素直にお礼を言う。

「ありがとう」

「ごちこそ、ありがとう」

そして彼は私にキスをくれる。

優しい瞳、優しいキス。

夢のように素敵な時間。

だけど大人だったら知っている。どんな素敵な夢だって、いつかは覚めて現実に引き戻されると。名前も知らない彼の優しい笑顔は、やがて少しずつ困った顔になっていく。

ほらね、夢は覚めちゃうんだ。

私の予感的中した。

「タミちゃん、俺……あの……言いくいんだけど、今、女の人と真剣に付き合うとか、そういうの考えてないんだ」

「え、あ！ 私もそんなつもりないから!!」

私の喉のどから必要以上に大きな声が出た。

私の顔も必要以上に笑っている。

何も傷つくことなんてない。現実に引き戻されただけ。

一人前の社会人でも、在宅ワークだと起床時間は自由だ。

私は大抵、深夜二時頃まで作業をして、午前九時には起床する。

朝起きたら、男性並みの適当さで身支度を整え、片手にジャムをのせた食パン、もう片手にコーヒーを入れたタンブラーを持って仕事部屋に入る。

毎日のことだけど、この部屋は起きたばかりの頭にはあまり気持ちのいい場所じゃない。

本棚に並んでいるピアズリーやフェルメールの画集の間には、さりげなくグラビアアイドルのヌード写真集。建造物の写真集とボタニカルアート集の間には官能小説。

画材を収納してある棚には、ペインティングオイルと一緒にアダルトグッズが並び、机の脇には胸も露わな女性のイラスト。

“デザイン関係”。私はそれほど親しくない人に対し、自分の仕事をそう伝えていた。

だってイラストレーターだと言ったら、大抵「見せて」って言われる。

でも、こんなエッチな絵、見せられるわけがない。

私は主に成人向けの絵を描くイラストレーターを生業なりわいとしているのだ。

昔は全然売れない漫画家だった。メジャーな雑誌に短い読み切りが二作掲載されたものの、そこ

で頭打ち。

それでも、中学時代から一緒に漫画を描いていたえっちゃんやアシ仲間と一緒に、BL本をコミケで売ったりしていた。

その時、ラノベを書いているサークルから、挿絵の依頼を受けた。以来、ジャンルを問わずに格安で挿絵を描きまくっているうちに、“早い、安い、うまい”が揃ったイラストレーターとして名前が売れた。

ゲームになるほどバカ売れた日系ラノベの挿絵を描いたことが転機となり、今じゃ個性的な性描写のできるイラストレーターとして、有名な作家先生の装丁イラストも描かせてもらうようになった。

私は自分の仕事に誇りを持っている。昔は誰もが描きそうな絵を描いていたけれど、たくさん悩みながら描き続け、今では私じゃないと表現できない絵を創作していると自負していた。

ただどここの誇りは大声で叫べる類たぐいのものじゃない。

(とりあえずこれは破棄かな)
私はコーヒーを飲みながら、昨夜から描きっぱなしで机の上に放置してあるデッサン画を見下ろした。

顔、背中、指、上半身、下半身。彼の全て。

私は彼が出ていってから、脳に刻まれた彼の姿をデッサンしまくった。

何度描いても、あのしなやかな逞たくましさ、弾力のある肌質が表現できなくて、朝方まで何枚も描き

続けた。

もう二度と彼の体を見ることができないならば、せめて紙に記録してやろう、と思つてのことなのだが、改めて見ると、彼への未練に満ち溢れた絵だ。

昨晚の夢を、夢で終わらせたくないと語っているようだった。

私はそれら二十枚ほどの紙を勢いよく丸めると、ゴミ箱に投げ入れる。

変に未練を残したら、彼に申し訳ない。

「真剣に付き合うとか、そういうの考えてないんだ」と言つてくれた彼に、私は感謝している。

唯一付き合った男性である大学の先輩は、真剣に付き合う気などなかったくせに真剣なふりをし、最後に手ひどく私を捨てたのだ。

三十歳の今なら、日本酒を飲んで涙の一つも流せば忘れられるだろう失恋も、二十歳の私にはきつかった。

名前も知らないあの彼は、何も悪くはない。

“ちょっと遊んだだけ”という警告をしてくれた彼は、嘘をついた元彼よりずっと親切だ。

◇

『なにそれ！ セフレになれって言つてるようなもんじゃん。最悪だよソイツ』

「セフレって、継続的にセックスする関係のことでしょ!? でも、私はもう二度と誘われないと思

う。だから、セフレなんていいものじゃないよ」

遅めの昼休憩を取りながら、私は電話でえっちゃんに昨夜のことを報告した。

爆笑してくれると期待したのに、受話器の向こうから聞こえてくる彼女の声は不機嫌だ。

『タミ、もう少し自分を大切にしなよ。殺されて金品奪われても仕方なかったんだからね。女の一人暮らしは狙われやすいんだよ』

(シャワー浴びて準備しとけつたのはどこのどいつだ)

一方的なえっちゃんからの非難に、私は苛立ちをつのらせる。

えっちゃんが心配してくれるのはありがたいし、自分が間違つた行為をしたのも分かっている。だけど結局、それを望んだのは私なのだ。

「私としては後悔してない……つていうか、いい誕生日の思い出になって感謝してるくらい」

『でもセックスしといて名乗らないような男、絶対クズ！ 都合のいい女になっちゃダメだよ。イーグル便ならまた配送で顔合わせるんでしょ?』

「まあ顔は合わせると思うけど……二人ともいい大人だから……放つといて」

『……』

「……ごめん……」

『すでに惚れてるじゃん』

「……惚れてない……」

私は、ぎくしゃくしたままえっちゃんとの電話を切った。

えっちゃんは大親友。だけど早々^{はやばや}とオタクをやめて素敵な旦那さんを見つけ、可愛い子供までいる。

そんなえっちゃんには、私の気持ちなんて分からないだろう。十年もの間、男に相手にされず、毎日自分だけのご飯を作って、自分の発する音しかしない家で毎日戸締まりをして一人寝する三十路^{みそじ}女の気持ちなんて。

恋とか、そんな贅沢^{ぜいたく}なものじゃない。

私の言い間違いと彼の性欲が、アイスクリームの魔法でたまたま絡み合った。ただ、それだけ。

私は壁に掛けている時計に目をやる。

一時二十分。

たぶん今日は配達がないと分かっているのに、つつい時間を確認してしまう。

配達毎日必ずあるわけではない。週に四日程度だ。

(今日は顔を合わせない方がいい。昨日の今日だし、彼だって気を使うだろう)

朝から何度もそう思った。

それなのに私は時計ばかり見ている。

この日は自分でも呆れるほど時計を気にしていて、いまいち仕事に集中できなかった。かといって、留守中に配達に来たらと思うと、出かけることもできない。そうして無駄に時間を過ごして、

気がつけば夕方の六時。

こんなペースで仕事してちゃダメだ。

私は普段からたくさんの仕事を抱えているため、常に締め切りに追われている。『早い、安い、うまい』で名前を売ってしまったため、キャリアは積んでいるのにまだに仕事の単価が低い。だから数をこなさなければ、纏^{まと}まった金額にならないのだ。

一つの仕事がスケジュール通りに進まなければ、その次の仕事に支障が出てくる。

遊びのセックスだったのは重々承知しているくせに、仕事に支障^{きた}を来すほど動揺している自分が情けなかった。

私はベランダへ出て、オレンジ色が濃くなりつつある空を見上げながら、ジョウロで鉢植えに水をやる。

小さなベランダで育てているのは、十本のマリーゴールドと、大きく育ったペチュニア、そして食用のシソ。

マリーゴールドは、引越してきた時に買った一株から種が取れて以来、毎年プランターに植えている。

ハンギングにしている二株のペチュニアは、寒い日には室内に入れてコートハンガーに引っかけているせいか、通常一年で終わるところ三年も保^もっている。

一人暮らしをしていると、寂しさからこうやって何か生物を傍に置きたくなるものだ。

水やりの次は洗濯物の取り込み。

手がバスタオルに触れた時、一瞬手が止まった。
昨日彼が使ったバスタオル。

顔に押し当ててみると、よく日に当たった洗濯物の香りしかしなかった。

実は、このタオルを洗濯機に放り込む時、ちよつと躊躇した。石鹸の匂いにほんの少し混じった彼の匂いが名残惜しくて。

こうして彼の痕跡が消えていくと、昨夜の出来事も夢のように消えてしまいそうだ。
だけど私の体の奥には、彼が与えてくれた疼きはまだ残っている。もうすぐこの疼きさえも消えていくのだろう。

そうなれば、昨日の出来事は本当に夢となってしまうのかもしれない。

私は取り込んだ洗濯物をリビングルームに置いた。

すると、小さな箱が目に入った。昨日、受け取ったまま放置していた、エバーラスティング商会からの自称“化粧品”な大人の玩具。

改めて中身を手に取ると、その姿はなかなかグロテスクだった。

小説の挿絵を描くための参考資料として購入したものだ。小説の中で微に入り細にわたり説明されていたので、なるべくそれに近いものを選んだらこの有様。まったくハレンチ極まりない形をしている。

エロ用品は全て仕事部屋に隠しているので持っていこうとした時、プツとインターフォンが鳴った。

私はインターフォンを見つめ、思わず体を硬直させる。

時間を見たらもう夜の七時。

いつもならこんな時間に荷物が届くことはあまりない。大抵昼だ。

他の部屋に来たお客さんが部屋番号を間違ったのかもと思いつながら、インターフォンに答える。

「はい？」

『イーグル便です。お届けものです』

「……ご苦勞様……で……す」

声が震えた。

コン、コン、コン。

ドアが小さくノックされる。

一、二、三。

数えて私はドアを開ける。

「レアチーズケーキとクッキー&クリーム。どつちがいい？」

彼が立っていた。

はにかんだ笑顔で、コンビニの小さなビニール袋を私に差し出す。

「ありがとう」

体をぎくしゃくさせながらも、余裕のあるふりしてそれを受け取ろうとした時、ふと自分の左手に握りしめていたモノに気がついた。

自称「化粧品」の、どう見ても大人の玩具。

緊張で、私は手が白くなるほど強くそれを握りしめていた。

(ヒイイイー!! まさかのハレンチ自白!)

と心の中でどこぞの悪役集団のような甲高い悲鳴を上げた私は、卒倒しかけるのを必死で堪えて、それを自分の背中に隠した。

逆セクハラ自爆で死んでしまいそう……

「ありがとう!! とりあえず冷凍庫に入れるね!!」

私は素っ頓狂な声をあげ、彼の顔もろくに見ないままに回れ右して廊下を猛ダッシュする。

光速で自称「化粧品」、正体「大人の玩具」を仕事部屋に叩き込むと、やっと落ち着いて玄関に戻った。

「冷凍庫に入れるんじゃないかった?」

アダルトグッズなんて見たことも聞いたこともありません、みたいな令嬢風微笑を貼りつけた私を、彼は笑いを押し殺したような顔で見つめてくる。

私は彼に言われて、アイスクリームの入った袋を持ったままだったことに気がついた。

「それともアイスよりセックスの方がよかった?」

「……」

「両方欲しい子、手を挙げて」

「ハイイ」

釣られて手を挙げてしまった私。

もう二人で笑うしかなかった。玄関で彼と一緒に大爆笑してたら、恥ずかしさもモヤモヤした気持ちも吹き飛んだ。

「タミちゃんまじ可愛い。抱きしめたいけど、俺、今日はシャワー浴びずに急いで来たから超汚くって……悪いけど風呂場使わせてもらっていい?」

「もちろんいいけど……」

慣れないお世辞に頬を染めながら、私は玄関で佇んでいる彼を上から下までチェックした。言われてみれば、確かに汚い。

彼はいつものイーグル便のものではない、何か別のユニフォームを着ている。

それは土ぼこりで所々茶色く汚れていた。

バスケットかサッカーとかラグビーとか、そんなスポーツチーム系のユニフォームで、前身ごろには『10』とプリントされている。

スポーツに全く興味が無い私には、それが何のユニフォームなのか特定できなかったけれど、その汗と土の匂いは魅力的に感じられた。

「俺、臭いだろ?」

鼻をピクピクさせていたため、私が匂いを気にしているとも思っただろう。

彼は私の鼻から遠ざかるみたいに距離を取ると、「おじゃまします」と言っただけで部屋に上がる。

(汚くってもギョッとしてほしい!)

私は気がつく、その匂いに誘われるように彼の背中にしがみついていた。首をひねった彼はしがみつく私を見ると、眩しそうに目を細めて笑う。

体を反転させた彼の腕が私を強く抱きしめ、乾いた唇が私のおでこにキスをした。

「そんな風に甘えられたら、全部食べたくなる」

彼が私の耳元で悪戯っぽく囁いた。

「キヤッ！」

私が突然叫んだのは、彼に持ち上げられて体が宙に浮いたからだ。

彼は私のお尻に両手を掛けてぐっと持ち上げると、肩に担ぐように抱きかかえて歩き出す。

「お、重いから！」

「軽い軽い」

彼は楽しそうに鼻歌を歌いながら、私をベッドまで運んでしまう。

「そこで待ってて。シャワー浴びてくる」

「……はい」

そう答えたものの、私はすぐにベッドから抜け出した。バスルームからは水の音と鼻歌が聞こえてくる。

アイスクリームの入った袋を手握ったままだった。冷凍庫に入れなければ。

レアチーズケーキとクッキー&クリームを冷凍庫に放り込んで、私はふと思う。

（スポーツした後で、お腹が空いてるんじゃないかな？ 夕食時だし）

買い物に行っていないから、冷蔵庫の中に大したものはない。

（でもベーコン、しめじ……牛乳もあるし……缶詰のマッシュルームも棚にあったかも。クリームソース系だったらなんとかなるな）

考えながら、私の手はすでに動いている。ソースだけ作っておいて、パスタは食べたい時にゆでればよい。

鍋にバターを放り込んで、溶けたところで小麦粉を投下。ベーコンとしめじをフライパンで炒めつつ、マッシュルームの缶詰を開ける。

（そうだ、冷凍のグリーンピースも入れよう。彼、グリーンピース食べれるかな？）

「キヤッ！」

私が再び叫んだのは、突然後ろからお尻を掴まれたからだ。

両手がつつり掴まれて、モミモミモミモミモミモミ……

今日はチュニクにカルソンという出で立ちだが、彼の手の感覚がそのカルソンの薄い生地を通してよく伝わってくる。

手だけじゃない。お尻に押しつけられているモノの感触も、よく伝わってしまう。

「タミちゃんのお尻、まじエロい。ムニムニでフワフワ。こんなエロいケツあんまりないよ……」

石鹸の匂いに包まれた彼は、カルソンの中に手を入れてまた揉み始める。同時にうなじを吸われる感覚が、たまらなく気持ちいい。

背後にいる彼の表情が見られないのがちょっと残念だけど、彼がこんなに喜んでくれるならば

望だ。

私は手を伸ばしてこっそりコンロの火を消した。

さつきからお尻に当たっているモノがさらに大きくなっていて、料理をしているどころではなくなったのだ。

「ここで挿れていい？」

少しかすれた声でそう言った彼は、返事を待たず私のカルソンの縁をもろともショーツを引きずり下ろした。

そして私の腰に両手を添えて引き寄せる。

私はこれから来るであろう衝撃に備え、キッチンカウンターの縁を両手で強く握った。

「はあんふ……」

彼は私の腰をさらに引き寄せると、硬く大きなソレを後ろから押しつけ、焦らすようにゆっくりと挿入した。

明るいきッチンで、しかも立つたまままだなんて、いくらエッチなイラストに慣れた私でも恥ずかしい。

だって彼には色々見えちゃっているわけで……

なんとかお尻を閉じようとしても、奥まで入ったモノの圧迫感がすごくてそれどころではない。大きすぎて少し痛いけれど、彼がゆっくり突き上げ始めると、瞬間に痛みは快楽に変わった。自分の中がどんどん潤っていくのが分かる。

「あ……あん……ん……あ……あ……あ……」

彼が奥を叩くたびに声が出てしまう。

前から挿入された時とは全然違う感覚。擦られる場所が違って、彼をより深く感じる。

彼の体温を感じ取っている背中が熱く焦れた。

「あ！ やああ……ダメ、ダメ、ダメ、ダメ！」

後ろから手を回した彼に芯の部分に触られて、私はたまらず大きな声を出した。

膣の奥から感じる深い快感と、クリトリスから感じる鋭利な快感に、私は思わず身を振る。

「濡れやすいね……すぐくエッチだ」

そう言いながら彼は、溢れた蜜を二本の指でかき混ぜるように動かし、意地悪くグチュグチュと鳴らした。

「タミちゃんは触れば触るほど溶けるアイスクリームみたいだな……」

もつと溶けると言わんばかりに、彼は私の奥を自分のモノで擦りながら、指でも苛めてくる。

「あああ……」

パンパンと肌を打ち合わせる音とともに私を突き上げては、そのリズムに合わせて長い指で花芯を撫で、私の理性を壊していく。

熱が私の体を支配する。

怖い。何かに追い詰められていくような恐怖。

“気持ちいい”と“怖い”が入り混じった訳の分からない感情が、私の口から喘ぎとなって漏れる。

「ヤダあ……ダメ……こわい、ああ……ダメえ、あ、ああ」

パチンと体の奥で何かが弾けて、私の頭の中は真っ白になった。それから、宇宙に放り出されたみたいに全てから解放される。

絶頂に達したあと、無重力で漂うようにぼんやりとしていたら、いつの間にか崩れ落ちそうになつて彼に支えられる。

そのまま抱きかかえられてベッドまで運ばれると、私は急に襲つてきた眠気に身をゆだねた。

エッチのあとに眠りを貪るのが、こんなにも心地いいなんて……

そして、起きた時にはこんな素敵な人が隣に眠っているという充実感……

世の中には私が知らない幸せがまだまだあった。

どれくらい眠っていたのだろう。

私は彼を起こさないようにそつと体を動かして時間を確認する。

夜の九時前。

（起こした方がいいかな？ 帰るの遅くなると明日の仕事にも差し支えるだろうし……）

そこまで考えて気がつく。明日は月曜日。たぶん彼はお休みだ。

だって日曜と月曜は、いつも彼以外の配達員が来る。

（もうちょっと寝かせておこう）

そう決めると、私はベッドからゆっくり起き上がった。

けだるい腰を擦りながら、ブランケットも掛けず全裸で眠っている彼の姿を堪能する。

柔らかにはねた髪、長い睫毛、日焼けした肌、ギリシヤ彫刻みたいな筋肉。

無遠慮に眺めていた私は、ふと、完璧な彼の体に太マジックで書いたような傷を見つけてギクリとした。

右足首に横に走る傷跡。一本の線がケロイド状になつて盛り上がっている。左足にも、ふくらはぎから膝の裏にかけて長い傷跡があった。

配達の仕事をしているくらいだから完治しているのだろうけど、怪我をした時の彼の痛みを思うと心がギョツと締めつけられる。

「……俺、タミちゃんに視姦されて……」

突然、寝ているはずの彼が呟いたので、私は軽く飛び跳ねてしまった。

彼は薄目を開けて、悪戯を仕掛けた子供のように笑っている。

「起きてるなら起きてるって言つてよ！」

笑われてばかりの私は、腹立ちまぎれに彼の逞しい太腿をパチンと叩く。その瞬間、張りつめた筋肉のすごさに息を呑んだ。

そして、思わずそのままナデナデしてしまう。私もあれだけお尻をモミモミされたのだから、これでおあいこだ。

「筋肉、すごいね。特に太腿」

「サッカーやつてるから。タミちゃん、サッカーに興味ない？」

私は首を横に振る。世間がJリーグだ、ワールドカップだ、と騒いでいても、私にはその熱狂ぶりが今ひとつ分らない。

「……興味……ないんだ……」

彼は突然神妙な顔をした。

ある野球チームのファンは同じチームのファンとしか付き合えないって聞いたことがあるし、もしかしたら彼もサッカー好きとしか付き合えないのかも。

回答を間違えたかなとハラハラしている私をよそに、彼は突然「腹減った〜!!」と叫び、ベッドから飛び起きた。

そして「タミちゃん、料理してるとこ襲つてごめん。反省するから、俺に何か食べさせて」とキスをしながら甘えてくる。

私がサッカー好きじゃないことは不問にしてくれたらしい。もうどうでもいいという雰囲気だ。

太腿を撫でた仕返しなのか、彼はまた私のお尻をモミモミしている。

「材料ないから大したのできないよ」

「いいケツ……」

私の首筋にキスをする彼の吐息が妖しくなってきたので、私は慌ててお尻を揉む手を払い除けた。

「十五分でできるから、大人しく待ってて!」

「はい」

彼は「待て」を言い渡された犬のように、ちょこんとベッドに腰掛けた。

可愛い、可愛すぎる。私はそのままベッドに戻りたい衝動に駆られたけれど、それじゃいつまで経っても料理は完成しない。

後ろ髪を引かれつつ、私も大人しくキッチンに向かった。



予告通り十五分後には、私は茹で上がったパスタにクリームソースを絡ませていた。

お皿に盛っていたら、ボクサーパンツ一枚の彼がキッチンにやってくる。

何度も見たはずなのに、均整の取れたあまりに美しい裸体に思わず口を開けて見とれてしまう。

彼と一緒にいるとぼんやりするのは、イケメンすぎる彼の罪ということにしておこう。

「タミちゃん、洗濯機使っていい?」

お皿に近づけた鼻を子犬のようにヒクヒクと動かしながら、彼が言った。

「いいけど……帰るまでに乾かないよ。乾燥機ないし」

実は私も気になっていたのだ。あの汗と土にまみれたユニフォームを再び着るのはかなり嫌だろ
うな、と。

「俺、今日帰らないとダメ?」

彼はほんのちよつと悲しそうな声で訊いてくる。

慌てて「いや、そういう意味じゃないけど……」と返すと、彼の表情がぱつと明るくなった。